

《私たち》という感覚

鈴木裕美

今回から、新たな選考委員として、佃典彦氏、土田英生氏、樋口ミユ氏が加わられた。それによって選考会の議論の過程は大きく変わったと感じる。

私が選考委員になったのは第21回からで、6年前になる。その時は松田正隆さんが抜かれての参加だった。佐藤信氏、渡辺えり氏、生田萬氏、鈴江俊郎氏が既に委員をつとめられていた。あくまでも私見だが、4名の方々は、当然ながらそれぞれ独自の意見、視線を持ちながらも、「《私たち》は何を選ぶのか」という意識がおりになったのではないか、と思う。私は、《私たち》に混ぜてもらった感覚があった。それは不快なことでは全くなかった。寧ろ、その《私たち》という感覚こそが、OMS 戯曲賞の本質、あるいは特徴なのではないか、とさえ感じた。それは選考委員会として、文字通り、主語を《I》ではなく、《WE》にしようとする意思のことだ。具体的に言えば、お互いの意見に積極的に影響を受けようとする態度の末、一つの結果にたどり着こうとする意思である。

今回は居残り組の方が2名だった。いや、2名というのはおこがまし過ぎる。第1回から参加の佐藤信さんと私を、2名と一括りにするのは乱暴だ。ともかく、新しく参加された方が3名で、具体的に数が多い。ここで《私たち》は消えたのだと思う。

《私たち》が消えたことに、私は否定的ではない。何かが終わって何かが始まるのは、当然のことだ。またこれから新たに、《私たち》と呼べる関係性ができていくかもしれないし、あるいは《私たち》という感覚が必要なく、議論が一つの結果にたどり着く方法が編み出されるかもしれない。

いずれにせよ、今回、佳作が3作品になった理由として、《私たち》が消え、その代替えのものはまだ形作られなかったことは、一つの大きな要因だと、私は思う。選考会が比較的長時間になったのもそうである。繰り返すが、それに否定的ではない。ただ次回は大賞、佳作を1作ずつ選べると良いと思っている。

九鬼さんの選考経過報告で、『再開後、新たな委員達から、OMS 戯曲賞は、どういう方に受賞してもらおう賞なのか、趣旨について、改めてお聞きしたいという希望が出された』とあるが、その発言をしたのは、私の記憶では、私である。そこまでの議論から、改めて確認をする必要性を強く感じた。今思えば私は、「私の感じていた《私たち》という感覚は継続して持つべきですか？」ということを質問したかったのだと思う。そんな個人的感覚についての質問が、伝わるはずはなかったのだが。私としても、今一度 OMS 戯曲賞とはどんな戯曲を選ぶ賞なのか考え直したいと思っている。例えば、今後ミュージカルの戯曲がエントリーされることもあると思う。その時、私たち、あるいは私はどう対応するのか。

以前も書いたことだが、私はこれまで、劇作家ではなく、演出家として選考会に参加している。戯曲にとって演出家は、一般的には、それを上演する際にしか必要ない存在だ。当たり前だが、《読者》と戯曲だけでも、戯曲の「文学としての側面」の関係は成り立つ。

そして、演出家が存在する＝上演する場合、《読者》はいなくなり、代わりに《俳優》《スタッフ》と共に、《お客様》が出現する。私が戯曲を読む際、そこには常に俳優とスタッフとお客様が存在してしまうということだ。

今回、私は横山拓也氏の『逢いにいくの、雨だけど』を推した。作家が、これを俳優がお客様の前で演じて欲しい、と思って書いていらっしやると思う。その意味で良いと感じた戯曲は他にもあるが、横山作品が一番練られていると感じた。反対に戯曲として面白いとは思うのだが、演出家や俳優の存在への期待を感じ難かったのが、田中作品だ。私にはそこが閉じているように思ってしまった。

また今回は、「自分の本当の居場所を探す」人物が登場する戯曲が非常に多かった。現代日本に生きていて、個人的にその感覚にはとても共鳴した。

ここは本来、選評を書くべき場である。選考会に対してどう思ったかなどに文字数を使うべきではないと承知しているが、今回はそのことを書いておきたかった。また次回、新たな戯曲、新たな作家の方に出会えるのを楽しみにしたいと思う。